

下田歌子記念女性総合研究所

# News letter



2021年11月27日に、渋谷キャンパスにて、『研究叢書第1巻 下田歌子と近代日本—良妻賢母と女子教育の創出』の出版記念シンポジウムを開催しました。

## Contents

- 02 **Column 01**  
**下田歌子研究のはじまり**  
—『下田歌子と近代日本—良妻賢母論と女子教育の創出』の刊行に寄せて  
京都大学 名誉教授 小山 静子
- 03 **Column 02**  
**下田歌子と近代日本の「帝国」の思想**  
—『下田歌子と近代日本—良妻賢母論と女子教育の創出』の刊行に寄せて  
お茶の水女子大学 教授 小玉 亮子
- 04 **Column 03**  
**女性と美術** —江戸時代の女性画家  
文学部美学美術史学科 教授・香雪記念資料館 館長 仲町 啓子
- 06 **Column 04**  
**1848年 アップステート・ニューヨーク**  
—アメリカ第1波フェミニズムのはじまり  
文学部英文学科 教授 稲垣 伸一
- 08 **下田歌子ヒストリア② 下田歌子先生と椿大神社**  
兼務研究員・文学部国文学科 教授 深澤 晶久
- 10 **Column 05**  
**英国の下田先生の一曰**  
短期大学部英語コミュニケーション学科 教授 武内 一良
- 11 **Column 06**  
**文学は社会問題と「私」をつなぐツール**  
—森鷗外の「高瀬舟」を契機に  
兼務研究員・人間社会学部現代社会学科 助手 神木 まなみ
- 12 **研究所活動報告**

# 下田歌子研究のはじまり

京都大学名誉教授 小山 静子

**下**田歌子のことを、伊藤野枝は「えたいの知れない人」「一筋縄ではいかない女」と述べた（『下田歌子女史へ』『青鞥』大正3年10月）。これは同時代を生きた伊藤野枝の直感に基づく言葉であるが、わたしはこの真意を、自分にはとらえきれない「大きな人」という意ではないかと理解している。今回、わたしが『下田歌子と近代日本—良妻賢母論と女子教育の創出』を通読してまず思い出したのはこの伊藤の言葉であり、下田歌子を丸ごと理解するのはなかなか容易なことではないという率直な感想をもった。

下田歌子は歌人であり、古典文学に造詣が深く、女子教育家であり、社会事業家であった。そして数多くの著書を書き、雑誌等にこれまた数え切れないほど多くの文章を発表している。さらには講演活動も積極的にこなし、いくつもの女性団体に関わっていた。このような下田の姿を明らかにすべく、本書では下田の思想や活動について、皇后との関係、体育・スポーツ教育、イギリス留学の意味、中国への女性教員の派遣、手芸論や家政論など、10人の著者がそれぞれの視点から思い思いに論じている。それは、下田歌子という人間のありようを多面的に浮き彫りにしているという点で壮観ですらあり、学ぶところも多かった。そしてこのような多方面で活躍した彼女の一端を本書が明らかにしたことは、本書の紛うことなき功績である。

しかし読み進めるうちに、下田歌子という人物はいつたい何者なのかという、下田の全体像がなかなか浮かび上がらないことに、わたしはもどかしさを感じてしまった。ここでいう全体像とは、彼女の思想や活動が網羅的に論じられていないということではなく、彼女の根幹に



あるもの、活動を突き動かしていく主義主張が何であるのか、それがなかなか明瞭な姿となって現れないという意味である。ただ急いで書き加えなければならないが、これは、下田に関する本格的な研究が

女性総合研究所では、昨年8月に、『研究叢書第1巻 下田歌子と近代日本—良妻賢母と女子教育の創出』(勁草書房)を刊行いたしました。また、11月27日には、叢書の刊行を記念してシンポジウムを開催しました。そこで、叢書の執筆に加わってくださった女子教育史の小山静子さんと、ドイツ教育史がご専門の小玉亮子さんに、書評を書いていただきました。

ない中で、本書が様々な視点から下田研究を行ったからこそ生じた、下田歌子とは何者なのかという問いの浮上であり、本書が一步を踏み出したからこそ、見えてきたことである。

本書の編者は、下田歌子を総体としてどのようにとらえるのかという問題に自覚的であり、終章において、彼女を近代思想としての保守主義者、ドメスティック・フェミニストとしてとらえようとしている。しかし残念ながらこれは編者の個人的見解にとどまっており、このことについて執筆者間で議論がなされたわけではないし、この視点が執筆者に共有されてもいない。それゆえ、下田の全体像をどのようにとらえるのかという問題意識が希薄なままに、下田の思想や行動を個別に考察した感があり、わたし自身はこのことを執筆者の一人として反省してもいる。

本書が刊行されたことで、下田歌子研究は第二ステージに進むことになるだろう。その際には、下田歌子は近代思想としての保守主義者であり、ドメスティック・フェミニストであるという、編者が提示したとらえ方の妥当性も含めて、もっと下田歌子の全体像をめぐる議論が開かれることを願っている。





Column  
02

# 下田歌子と近代日本の「帝国」の思想

お茶の水女子大学 教授 小玉 亮子



『下田歌子と近代日本—良妻賢母論と女子教育の創出』は、実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所の研究叢書の第1巻として編集されている。本書は、極めて重厚なものとなっているのだが、まず目を引くのは、その美しい装丁である。グレーと小豆色の美しい配色を背景として、一人の女性が座っている。古い写真だからだろう、必ずしも解像度は高くないが、くっきりと背筋をのばして凛として座っていることはよくわかる。そしてなにより、この女性はこの本を手を持った読者から目を離さない。あまりに見つめられて、こちらが目を逸らしてしまいそうな気にもなる。ただものではないのだろうと、写真をみただけでもつい、思ってしまう。

本書を開いてみて、下田歌子という人がただものではないとあらためて思う。12篇もの論文が、とにかく多様な角度から執筆されているからだ。

皇后との関係、女子体育、イギリス視察、帝国婦人協会、中国への日本人女子教員の派遣、女子教育思想、手芸、家政論、幼児教育。各論文のキーワードをならべていだけで、下田の活動の幅の広さに驚かざるをえない。そして、源氏物語から下田の生きた同時代まで、時間軸としても巨視的な視野をもち、イギリス、中国といった空間的にもグローバルな視野をもっている。高貴などはいえない出自にも関わらず、皇后の寵愛を受け、イギリスの上層階層の人々と交流をし、それだけではなく、下層の女性たちのことも視野に入っている。そういった人的ネットワークの幅の広さにも圧倒される。日本史に不案内な私にとっても、この時代の人物として下田が傑出した人物であることは容易に想像がつく。

本書を読んでいくと、こういった下田の空間的・時間的な視野の広さだけでなく、そこでなされた下田の多様な活動の背後に、いくつかのキーワードが繋がっ

て見えてくる。それは、本書の副題である、良妻賢母だったり、女子教育であったりするのだが、その収斂していく先に「帝国」が浮かび上がってくるように思う。下田は帝国の中核、すなわち皇室につながるだけでなく、帝国の女性たちの導き手となり、大英帝国に訪れ、日本が植民地化したアジアに女教師を派遣する。帝国を支えるために日本女性に列強の女性におとらない身体を求め、臣民の再生産を担うことこそ女性の使命であると考える。日本を近代の帝国につくりあげるために、日本女性としてどのような貢献できるのか。本書を通してそうした下田のポジショナリティ＝「帝国」の思想を読み取ることができる。

下田が亡くなったのは1936年。二二六事件の年である。その後、日本の激動の時代は加速していき、下田が希求した「帝国」が瓦解したことを私たちは知っている。しかし、下田が希求した大日本帝国は1945年に実態として終焉したものの、日本をふくめて世界中の帝国なるものが終わりを遂げたわけではなく、「帝国のヴェール」として、その思想はいまだ作動しつづけていることが指摘されている（荒木和華子ほか編、2021、『帝国のヴェール』明石書店）。デュボイスやナワール・エル・サーダウィが「ヴェール」と呼んだように、現在でも帝国の差別や障壁は不可視なものとして存在し続けているのである。花嫁のヴェールは「魅力的で美しいものとして表象・認識されることが多く、このヴェールを纏うことは一部の女性の憧れでもあることも珍しくない」（同上書、p.5）という。

下田の没後、下田の仕事やその意志はどのように展開していくことになるのだろうか。下田の「帝国」の思想もまた、現在でも魅力的な「帝国のヴェール」として存在しているのだろうか。本書を読み終えて、そんなことを思ったりしている。

文学部美学美術史学科 教授・香雪記念資料館 館長 仲町 啓子

**歴** 歴史上「描いた女性たち」は意外と多くいます。平安・鎌倉時代では「女房」たちが描いていたという記録が残されています。文芸のようにテキストが残らないので、実態は不明ですが、中には待賢門院璋子(1101-45)に仕えた土佐の局(生没年不詳)のように本格的な障子絵を描いた女性もいたようです。しかしながら、具体的に活動が把握できるのは江戸時代です。

最初に登場するのは清原雪信(1643-82)です。彼女が十七世紀後半に職業画家として活躍し得たのは、江戸初期画壇の長・狩野探幽(1602-74)の姪孫という血縁関係をたよりに、探幽風の新たな大和絵を描いた点にあったと思われます。大和絵つまり「和」の文化は、平安時代以来「漢」に対して女性性と深く結びつけられていたという歴史があります。しかも、当時の女訓書などでは歴史上の公家女性是一种の理想と見なされていましたから、《紫式部図》(挿図1)のような作品は、まさに女性画家にふさわしい画題として歓迎されたに違いありません。

「女大学」を含む『女大学宝箱』が初めて出版されたのは、享保元年(1716)です。江戸期の女性の地位の低下を招いたとして近代以降、悪評を受けてきた「女大学」でしたが、近年では女性が知識を身に付け、社会へも目を向けることを後押しした点を高く評価する研究も出てきています。儒学者などの家から、女性画家が輩出される一因は、こうした儒教的な合理主義にあり



挿図1  
清原雪信《紫式部図》(実践女子大学香雪記念資料館蔵)

ました。さらに、漢字を多用した「女大学」などのテキストが、女性たちに仮名だけでなく漢字学習の機会を提供した点も重要です。女性と書との関わり方の変化の背景には、社会のジェンダー観の変化があり、それは十八世紀半ば以降、女性画家の作品から女性性の表象が徐々に後退していった要因のひとつと考えられます。

江戸時代の女性の場合、家庭内が絵画修業の場となることが圧倒的に多いのは事実です。その場合、当然ながら夫、父、兄などの画風を基本的に踏襲しています。南画(中国の文人画風を目指した絵画)を大成した池大雅(1723-76)の妻・徳山玉瀾(1727-84)、高芙蓉(1722-84)の妻・奥田来禽(生没年不詳)、谷文晁(1763-1841)の妻・林幹々(1769-99)と妹・谷舜英(1772-1832)、亀井南冥(1743-1814)の孫・亀井少槩(1798-1857)や、浮世絵師では葛飾北斎(1760-1849)の娘・応為(生没年不詳)などがいます。しかも彼女たちは夫とは別の姓を用いていました。たとえば池大雅の妻は江戸時代には徳山玉瀾と呼ばれていましたが、明治以降、夫婦同姓を用いることが法制化されると、奇妙なことに池玉瀾と呼ばれるようになります。彼女らが描いた画題としては、四君子(蘭、竹、菊、梅)が多く、なかでも蘭がもっとも好まれたようです。

十八世紀末から十九世紀になると、たとえ夫がいたとしても夫にほとんど依存することなく独自の制作活動を行う女性も増えてきます。南画系では、江馬細香(1787-1861)、林珮芳(1799-1879)、張紅蘭(1804-79)などがその筆頭格です。江馬細香は終生独身でしたが、頼山陽(1780-1832)らとも広く交友し、最晩年には本格的な山水画を生み出し、しかもそこに自らの漢詩を賛として添えています。珮芳は終生ほとんど伊勢に留まりつつも、新しく中国(清)から紹介された画風を身に付け、夫の死後も同郷の儒者・斎藤拙堂(1797-1865)や





挿図2  
張(梁川)紅蘭《墨梅図》  
(実践女子大学香雪記念資料館蔵)



挿図3  
織田瑟瑟々《須磨桜真圖》  
(実践女子大学香雪記念資料館蔵)



挿図4  
櫻井雪保《雙鯉上冰図》  
(実践女子大学香雪記念資料館蔵)

北海道の名付け親としても知られる松浦武四郎(1818-88)らとも親しく交わっていました。張紅蘭は夫・梁川星巖(1789-1958)に寄り添いつつ各地を旅しながらも、夫とは別の画風と詩風を磨き、自らの詩を賛とする《墨梅図》(挿図2)のように、詩書画一体となった独自の世界を生み出しました。

南画系以外からも平田玉蘊(1787-1855)、織田瑟瑟々(1779-1832)、櫻井雪保(1754-1824)などのような本格的な絵師も出て来ます。尾道を拠点に活動した平田玉蘊は、京都の円山・四条派の画風を身に就けて、寺院の襖絵なども手掛けています。織田瑟瑟々は当時の桜ブームに乗って専ら桜を描きました。「須磨桜真圖」と自ら款記を入れた作品(挿図3)は、生涯にわたって桜の「真」を求め続けた彼女の真骨頂が窺える作品です。水戸出身で父・雪館(1715-90)とともに江戸に出て活躍した櫻井雪保も、寺の板襖に父顔負けの雄渾な作品を描いています。力の漲った《雙鯉上冰図》は、2019年にアメリカの首都ワシントンのナショナルギャラリーで開催された展覧会でも展示されました。その他、

後水尾天皇(1596-1680)の第八皇女で林丘寺の開基となった照山元瑤尼(1634-1727)や、加賀藩主と結婚する、十一代将軍家斉(1787-1837)の娘・溶姫(1813-68)のように、趣味や教養として制作した高貴な女性たちの存在も見逃せません。

ここでは詳述できませんでしたが、女性たちの絵画活動の研究を手掛けるようになって、造形的な分析だけでなく、彼女たちが制作することのできた要件を探り、社会的かつ歴史的な背景を考察することの重要性を痛感したことが、私の研究生活にとってとても貴重な体験となりました。

仲町啓子先生のご著書『光琳論』(中央公論美術出版、令和2年9月)が「第19回徳川賞」(令和3年度)ならびに「第33回国華賞」(令和3年度)をダブル受賞しました。いずれも傑出した学術業績に贈られる、荣誉ある賞です。

光  
琳  
論

# 1848年 アップステート・ニューヨーク —アメリカ第1波フェミニズムのはじまり

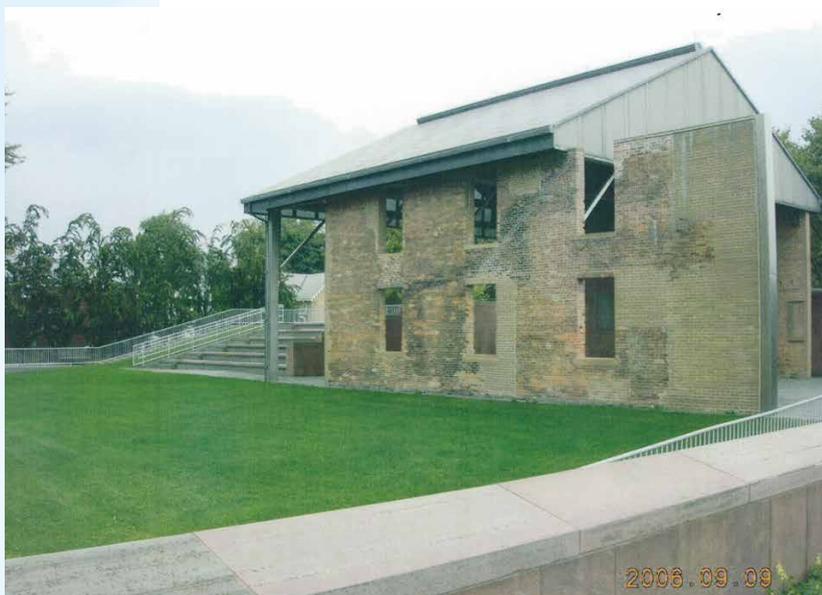
文学部英文学科 教授 稲垣 伸一

**高**校時代、世界史の授業で1848年は「テストに出るから覚えておけ!」と言われる出来事がいくつか起こった年だと記憶している。例えばその一つがフランス二月革命。隣国ドイツに波及して三月革命が起こるといのように、二月革命はヨーロッパ近代化にとって重要な事件だった。そしてもう一つ挙げるなら、アメリカ、カリフォルニアでの金鉱発見。これをきっかけに人々が一攫千金を狙ってゴールド・ラッシュが始まった。だからサンフランシスコを本拠地とするアメリカ・ナショナル・フットボール・リーグ(NFL)のチーム名は金鉱発見の翌年を示すフォーティ・ナイナーズ(49ers)となる。

それほど大きくは扱われないが、アメリカでは女性解放運動と関連する3つの出来事が同じ1848年にあった。しかもすべてがニューヨーク州北部“Upstate New York”と呼ばれる地域で。

## セネカ・フォールズ女性大会

アップステート・ニューヨークには「フィンガー・レイクス」と呼ばれる五本の指のように南北に細長く伸びる五つの湖がある。その一つカユーガ・レイクの北



セネカ・フォールズ女性大会が開催されたウエスリアン・チャペル跡  
(ニューヨーク州セネカ・フォールズ)

端近くにある小さな町セネカ・フォールズ(反対の南端近くに位置するのが名門コーネル大学のある町イサカ)で、アメリカ初の女性の権利を求める集会が1848年7月19、20日に開催された。中心となって集会を企画・運営したのが初期アメリカ・フェミニズム運動の指導者エリザベラ・キャディ・スタントンとクエーカー教徒の女性牧師ルクリシア・モット。

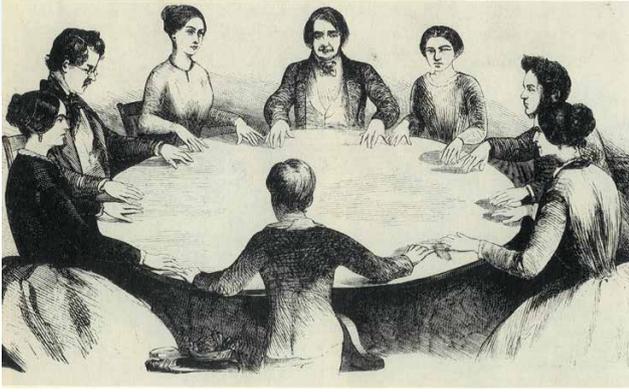
集会では「所信宣言(Declaration of Sentiments)」と呼ばれる決議文が採択され、その文書で要求された権利の一つが女性参政権だった。この権利が全国的に認められるのはその70年以上後、合衆国憲法修正第19条が批准される1920年まで待たなければならない。そのセネカ・フォールズ女性大会が開催された1848年から1920年までが、アメリカの「第1波フェミニズム」の時代である。

「所信宣言」で要求された女性の権利は参政権にとどまらない。他には財産を管理する権利を求めた財産権(当時、女性の財産は、結婚前は父親、結婚後は夫により管理されるのが通例だった)、また、夫婦が別れた場合の子供の養育権(当時はまだ離婚に関する法律さえ定まっていなかったのだが)などが含まれる。現代でも親権を巡る離婚時の争いはよく聞くので、養育権の要求は当時としては斬新だったに違いない。こうして女性の権利がアメリカ史上初めて明文化された形で要求されたのだった。

## ロチェスター・ラッピング (ハイズヴィル事件)

同じ1848年の3月、これもアップステート・ニューヨーク、ロチェスター近郊の村ハイズヴィルにあるジョン・フォック





一般家庭で催された降霊会 (séance)

ス一家の屋敷で原因不明の物音が聞こえ (ラッピング現象)、フォックス家の娘マーガレットとケイトはその音の原因とされる霊と交信するようになる。この心霊現象をきっかけに、人間は死後の霊と交信できると信じるスピリチュアリズムがアメリカの広い範囲で大流行した。そして霊媒と称する人々が多数現れて、たくさんの聴衆を集めて霊からのメッセージを伝え、また、降霊会が行われるようになった。

アメリカで流行したスピリチュアリズムは、単なる好奇心から心霊現象に関心を持つ人々だけでなく、社会改革思想を持つ人々も惹きつけた。というのも、スピリチュアリズムを信じる人々は、人は死後、霊となって何の矛盾もなく調和のとれた天の世界に住むと考えて、人間の住む下界にもその調和のとれた世界を創造するために霊からのメッセージを進んで得ようとしたからだ。

スピリチュアリストたちが持っていた社会改革思想は、例えば19世紀半ばに広がりを見せた奴隷制廃止運動であり、また、ロチェスター・ラッピングの4ヶ月後セネカ・フォールズに始まる女性解放運動だった。セネカ・フォールズ女性大会準備中エリザベラ・スタントンが「所信宣言」の文案を練っていた時、使用していた机がラッピング現象でたびたび揺れたという逸話さえ残っている。その真偽はともかく、スピリチュアリズムの流行が始まると、それを信奉する人々が同時に女性解放運動にも関わるといふ例も多く見られ、スピリチュアリズムと女性解放運動はしばらく蜜月状態にあった。

## オナイダ・コミュニティ

オナイダ・コミュニティは「複合結婚 (complex marriage)」と呼ばれる一種の多重婚を実践した生活共同体として知られる。このコミュニティがヴァーモント州パトニーからアップステート・ニューヨークのオナイ



オナイダ・コミュニティ中庭の風景 (1870年頃)。男性と女性が仲良く談笑している。女性のショートカットの髪と服 (ブルーマー) に注意。

ダに移ってきたのも1848年のことだった。

複合結婚が淫らな男女関係を想像させることから、オナイダ・コミュニティは批判的に見られることもしばしばだった。しかしこの制度、どうも当時世間で持たれていたイメージとは異なり、男性に性的な自制を強く求め、女性の身体に大きな負担となる妊娠にまで至らない男女関係を模索したという側面があるらしい。そうならばオナイダ・コミュニティは、現代風に言うならば生と生殖に関する決定権を、19世紀半ばですでに女性に与えていたと考えることもできる。そのような肯定的な見方をすると、なるほど女性はウエストをきつく絞った伝統的な服装ではなく、「ブルーマー」と呼ばれるゆったりした服を身につけている。女性解放と密接につながる服装改革の思想がコミュニティ内には浸透していたようだ。

多重婚を是とした淫らな集団なのか、女性の権利や健康を強く意識した集団なのか、意見は分かれるところだが、後者の見方をするならこのコミュニティは明らかに19世紀半ばに始まるアメリカ・フェミニズム運動の文脈の中に置くことができる。

いずれも1848年にアメリカ、ニューヨーク州北部で起こったこの3つの出来事は、一見、無関係に見える。しかし女性の地位や健康という観点から考えると、この3つは時に緩やかに、時に緊密に関係していることがわかる。アメリカ・フェミニズム運動黎明期の一端を、私たちは1848年のアップステート・ニューヨークに見ることができる。

[参考文献]

Braude, Ann. *Radical Spirits: Spiritualism and Women's Rights in Nineteenth-Century America*. 1989. Indiana UP, 2001.  
Foster, Lawrence. *Religion and Sexuality: the Shakers, the Mormons, and the Oneida Community*. U of Illinois P, 1981.  
稲垣伸一『スピリチュアル国家アメリカー「見えざるもの」に依存する超大国の行方』河出書房新社、2018年。



# 下田歌子ヒストリア 2

これまであまり触れられることがなかった下田歌子とその周辺に関する歴史秘話(エピソード)をお伝えします。  
そこには知られざる「人間・下田歌子」の姿があります。

## 下田歌子先生と椿大神社

兼務研究員・文学部国文学科 教授 深澤 晶久

### 出会い

今から15年も前のこと、私が資生堂の社員として、大学生のビジネスコンテストに審査委員として参加させていただき、その大会で最優秀賞に輝いたチームメンバーのある学生さんとの出会いからこのストーリーが始まります。その大会(日本学生経済ゼミナール関東部会インナー大会)における審査委員を務めさせていただいて10年以上、毎年約50人の学生さんとお会いしていますので、その数は700人を超えます。しかし、大会後にお付き合いをさせていただいている方は本当に僅かであり、その中のお一人大竹秀興氏こそが、下田歌子先生と椿大神宮を結び付けて下さったのですから、ご縁というものの深さと不思議さを感じます。

彼が大学を卒業され、ある大手通信会社に勤務されてからも年数回資生堂本社のある汐留でお目にかかりました。徐々に仕事のお話だけでなくプライベートにも話題が広がったある日、彼の父上大竹久雄氏が神社の禰宜ねぎを務めておられることにお聞きし、当時奉職されていたのが三重県鈴鹿市にある椿大神社と伺いました。

彼の導きもあり、以来年に1~2回参拝させていただくことになりました。そして、父上のお話しの中に下田



椿大神社(三重県鈴鹿市)

歌子先生が登場し、山本行恭椿大神社宮司の講和の中に、先々代の宮司が下田歌子先生に師事されたことがあったと記憶していますとの話題に触れられた時は、本当に驚くとともに、下田歌子先生の人脈の広さを改めて感じたわけです。

今回、ヒストリアに寄稿させていただくにあたり、大竹三谷八幡神社宮司のご紹介により、椿大神社の芝禰宜に事情をお伝えしたところ倉庫をくまなくお調べいただき、先々代の山本行輝宮司と下田歌子先生との交誼こうぎに関する資料をお送りいただいたということになります。

### 椿大神社とは

椿大神社は、伊勢国一の宮猿田彦大本宮であります。伊勢国鈴鹿山系の中央麓に鎮座する椿大神社は、往古神代、高山入道ヶ嶽にゅうどうがたけ、短山椿ヶ嶽つばきがたけを天然の社として、高山生活を営まれた国つ神「猿田彦大神」を主神とし、相殿に皇孫「瓊々杵尊」にぎのみこと、「栲幡千千姫命」たくはたちひめのみことを、配祀に「天之鈿女命」あめのうずめのみこと、「木花咲耶姫命」このはなさくやひめのみことを祀っています。

猿田彦大神は、天孫 瓊々杵尊降臨の際、天の八衢に「道別の大神」として出迎え、高千穂の峯に御先導申し上げます。そのことより、肇国の礎を成した大神として、人皇第十一代垂仁天皇の二十七年秋(西暦紀元前三年)、倭姫命の御神託により、この地に「道別大神の社」として社殿が奉斎された日本最古の神社です。

仁徳天皇の御代、御霊夢により「椿」の字をもって社名とされ、現在に及んでいます。また、猿田彦大神を祀る全国二千余社の本宮として、「地祇猿田彦大本宮」と尊称されています。



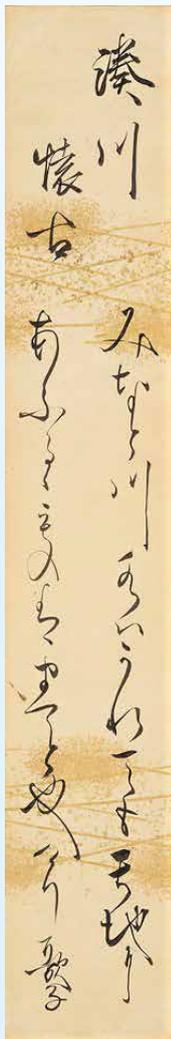
左から大竹久雄氏(現三谷八幡神社宮司)、大竹秀興氏、筆者

## 下田歌子先生のご功績

椿大神社の先々代山本行輝宮司の略譜を眺めますと、明治39年に「歌を下田歌子女史」に師事と記載されています。

そして、『椿神一代記』（椿宮山本神主行宗・編集発行、平成19年5月）の「三十七 神人山本齊生と下田歌子女史との関係に就いて」には、次のような文章が綴られています。

「明治大正昭和の三代を通じ偉大なる女傑として八十四の齢ひを重ね神化高天の原に帰宮せられた下田歌子女史は、その名の通り眞の歌人であった。又教育者でもあった。儒教的に育成された人格者でもあった。伊藤博文公が下田歌子さんを男子にしたら総理大臣となって天下の政治をやる資格者だと感服した話もあった。とにかく女として実に偉大な傑物であったが、神人山本齊生は此の人に師事して歌門の一人となり香風と云ふ歌号その香の字を許された。・・・」



「湊川懐古」  
和歌短冊（本研究所所蔵）

そして、当時下田先生が詠まれた歌の代表が次のものです。この和歌は、書幅や短冊などが実践女子大学図書館と下田歌子記念女性総合研究所に所蔵されています。

湊川懐古  
湊川水はかれても天地に  
あふるるものは  
まことなりけり

「下田歌子先生は余に歌はつくる可きものに非ず歌ふべき詠ず可きものであると。之れ又神人下田歌子姫命とも尊重すべき歌人であり、又学者であった。（中略）或る時自分が歌の原稿を以て先生の指導添削をを乞ふ為め渋谷の実践女学校に往き談たまたま人間教育のことに及んだ。・・・」

山本宮司が、渋谷の実践のキャンパスにお越しになっていたことに私は、更なるご縁の深さを

感じたわけです。

「道祖の神訓 講述第二回 靈通乃妙」（発行年月日不明）には、次のような一節もありました。

「明治四十五年七月の末天皇病に犯され給ふや下田歌



椿大神社 先々代 山本行輝宮司

子さんは夜の日も寝ずにご平癒を御祈りいたし山本齋生も一週間晝食を抜きにして御祈り申し上げた。所が七月二十八九日頃と思ふ下田歌子先生から手紙があり、只今麻生御殿から御知らせがあり最早御大切ならずやと思はれ全身むらさき色になり日下サンソ吸入器を御使用とのこと此の手紙は只今も山本齋生の手許に保存してある。そして愈々高天原に神上りなし給ふや下田先生は

大君の光りかくれしあしたより

暗路を辿る心地のみして

と御詠じになりこれも山本齋生の手許にある。」

と綴られている。椿大神社先々代山本行輝宮司と下田歌子先生の深いご交誼を感じる、とても興味深いシーンであると思います。

## 大学の価値は卒業生が決める

まさか、小生が下田歌子ヒストリアに寄稿させていただくことになるとは夢にも考えておらず、光栄の極みであります。下田歌子先生のご功績の幅広さに改めて敬意を表するとともに、その歴史の1ページに触れさせていただいたことに心から感謝申し上げます。

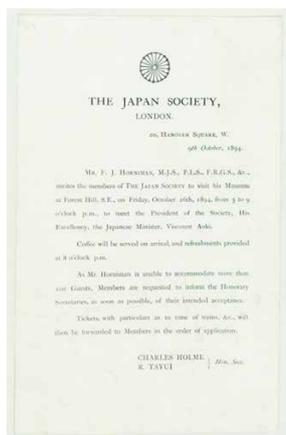
2014年に実践女子大学に奉職させていただいて以来、毎年9月、岩村の下田歌子先生墓参のための一人旅を続けております。私にとって、この大学で教鞭を取らせていただいていることへの感謝の気持ちでありました。一昨年（2020年）は新型コロナの影響で、やむなく自粛させていただくことになりましたが、昨年（2021年）は、11月に岩村の地を訪ねさせていただきました。

「大学の価値は卒業生が決める」このようなメッセージを送り続け、社会に飛び立った卒業生も7期目となりました。目の前の学生への全力投球が、素晴らしい卒業生を育てることになると信じ、「実践の実践」を積み重ねて参ります。



短期大学部英語コミュニケーション学科 教授 武内 一良

**下** 田歌子先生が英国に到着して10ヶ月ほど経ったある日、1894年10月9日付で招待状が“The Japan Society”（日本協会）から会員たちに届きます。内容は、当時紅茶の取引で財を成していたフレデリック・ジョン・ホーニマン氏の私邸（膨大な数の収蔵品が展示されている私設博物館の日本の間）にて、10月26日（金）の午後5時から午後9時まで日本協会が集まりを主催するというものでした。到着と同時にコーヒーが供され、午後8時には軽食が出るとあります。集まりの目的は、当時の駐英公使であり同協会会長の青木周藏氏との顔合わせというものです。この日本協会とは、下田先生



<https://www.horniman.ac.uk/object/ARC/HMG/PR/004/001/159/>より

がお世話になったあのエリザベス・アンナ・ゴードン夫人もメンバーになっている団体です。ゴードン夫人といえば同協会が設立された1891年に夫婦で日本を訪れており、翌年夫とともにこの日本協会に入会しています。となれば、ゴードン夫人に誘われ下田歌子先生も集まりに参列されていたはずで

最近購入した2004年発行の“Anglo-Japanese Alliance, 1902-1922”（1902年から1922年までの日英同盟）という書籍があります。アングロサクソン人の英国とアジアにある非アングロサクソン人の国、日本が同盟を結んだことは当時珍しいことだったため、その締結から失効に至るまでの経緯や理由などについて分析がなされています。その書籍の11章“Cultural Exchange at the time of the Anglo-Japanese Alliance”（日英同盟時代における文化交流）に、以下の文章が登場します。

1891年の終わりにロンドンの日本協会が設立された翌年に、彼女（ゴードン夫人）は夫とともに同教会へ入会を果たしていた。同時に、エリザベス・アンナ・ゴ

ードンはビクトリア女王の女官としてすでに働いていたのである。それゆえ、一流の教育者であり皇族の女学校の創設者でもある下田歌子が英国を訪れたとき、下田とエリザベス・アンナ・ゴードンは友人となったのである。[拙訳]

このことから、下田先生とゴードン夫人との意気投合された様子が伺い知れます。

さて、日本協会の集まりの翌日、英国の新聞“Times”（タイムズ）にその記事が掲載されます。この記事は、私が海外研修制度で英国に滞在中（2012年4月～2013年3月）、ケンジントン中央図書館のマイクロフィルムから偶然発見したものです。そこには出席者として、“Mme. Shimoda, of the household of the Japanese Empress”と下田先生が紹介されています。日本の皇后に仕えるマダム下田といった紹介です。駐英公使で日本協会会長の青木周藏はベルリンにいて出席できなかったとありますが、トレヴァー・ローレンス卿夫妻（二代目の準男爵）、エリオット・リーズ氏（後に初代準男爵）、W. アンダーソン教授、アーサー・ディオシー夫妻（日本協会創設者、理事長）、内田康哉（後に外務大臣）、Rinzaburo Tayui（後に在オーストラリア日本領事館領事）といった方々が出席者として名を連ねたとあります。

過去の天気分かるサイトを見ると、1894年は10月から11月にかけて英国南部が記録的な豪雨に見舞われ、ロンドンのテムズ川が氾濫してロンドン郊外が大洪水になったとありますので、おそらく下田先生が出席された集まりも雨の中で行われた可能性が高いと思われます。下田先生はどのようなお召し物でご出席されたかは分かりませんが、堂々たるお姿で英国の紳士淑女が集まる会にご参列されていたことでしょう。1年の予定で来たもののビクトリア女王に謁見しないまま道半ばで帰国することはできないという思いを胸に秘めながら、上流階級の方々と英国の寒い秋を過ごされたことと思います。

1894年10月26日の夕方、はるか英国の地にたたずむ下田先生にちょっと思いを馳せてみました。

# 文学は社会問題と「私」をつなぐツール

## — 森鷗外の「高瀬舟」を契機に



兼務研究員・人間社会学部現代社会学科 助手 神木まなみ

**私**は日本の近代文学を研究していますが、そのきっかけは中学校の国語の授業で「高瀬舟」を読んだことでした。

幼いころから運動と同じくらい本を読むことも好きでした。当時もっぱら読んでいたのはティーンズ向けの文庫小説で、謎解きものや学園ものファンタジーとジャンルは多岐にわたっていましたが、小説とは空想の世界のおとぎ話であり、その中の登場人物たちと一喜一憂することがとても楽しかったですし、今でもSF小説やファンタジー小説を読むと当時と同じようにドキドキワクワクしています。

しかし、鷗外の「高瀬舟」は当時の私が読んでいたティーンズ向け小説とは全く違う体験を私にくれました。みなさんご存じの通り「高瀬舟」は安楽死をテーマとした内容です。弟殺しの罪人喜助を船で護送する役目を担った同心・羽田庄兵衛が、喜助の罪人らしからぬ明るい様子に興味を持ち、犯した罪の顛末を語らせ、その内容に庄兵衛はやり場のない思いと疑問を生じるというのが、「高瀬舟」のあらすじです。

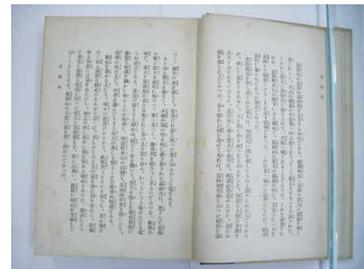
私が小・中・高校生時、メディアではこの「安楽死」が大きな問題として扱われているときでした。1991年のいわゆる「東海大学安楽死事件」により国内での「安楽死」への関心が急激に高まります。この事件は1995年に横浜地裁で判決がくだされ安楽死が許容される「四要件」が示されたことでも注目を集めました。1998年には「川崎協同病院」での安楽死事件も発生し、日常生活のなかで「安楽死」という言葉をよく目にした時期でした。

こうした時代に出会った「高瀬舟」は私の中で大きな衝撃でした。それまで空想のおとぎ話だった小説が、一瞬で自分の生きている世界とリンクした瞬間だったからです。それと同時に、なんとなくいつも報道されているなど他人事にしか思えなかった「安楽死」という問題が、自分自身にいつ降りかかってもおかしくない

「私」の問題なんだと思わされた瞬間でもありました。よく文学作品を読むことで、作品の登場人物の体験を追体験できると言いますが、追体験とはまさにこのことだと、いま改めて実感しています。

中学生の私は「高瀬舟」を読むことで、人はいつの時代も同じ問題を抱え続けている、そして文学とは社会問題と「私」をつなぐツールである、喜助も庄兵衛も現実の世界の私と同じように人生を歩んでいるのだと思知らされたのです。

現在兼務研究員として下田歌子と女子教育について思想的な観点から研究を行っています。下田が女性の地位向上と女子教育に奮闘した時代と、現代では状況が大きく異なるのは事実です。しかし女性が抱える問題はその見え方が変わっただけで、問題の本質そのものは下田の時代からあまり変化していないようにも感じます。私自身も女性として母として「今」を生きることを下田の著作から考えさせられる日々ですが、私の研究を通じて現代の人たちが抱える問題を解決する糸口になればと思っています。



「高瀬舟」春陽堂、大正7  
(会津若松市立会津図書館所蔵)



森鷗外肖像  
(国立国会図書館HP  
近代日本人の肖像  
『鷗外森林太郎』)

# 2021年度の活動

## ■ 常磐祭 ミニコンサート・展示

### 第8回渋谷キャンパス常磐祭「翔」

2021年10月9日(土) 17:15~17:45

「実践女子学園 校歌のいろいろミニコンサート」

Live 配信 17:15 ~ 17:45

解説：久保 貴子(専任研究員)

ピアノ・合唱指導：越山 沙千子(生活科学部生活文化学科助教)

合唱：生活科学部生活文化学科1年生



### 第65回日野キャンパス常磐祭「蝶」

2021年11月11日(土)~12日(日) 本館362教室にて

「実践女子学園 校歌のいろいろミニコンサート」

オンデマンド配信 学園資料の展示等

## ■ 研究叢書刊行記念シンポジウムの開催

### 研究所叢書第1巻『下田歌子と近代日本一良妻賢母論と女子教育の創出』刊行記念シンポジウム開催

2021年11月27日(土) 13:00~16:30

渋谷キャンパス創立120周年記念館403教室

同時開催zoomウェビナーによるオンライン配信

講演：荒井 啓子(学習院女子大学名誉教授)

香川 せつ子(西九州大学名誉教授・津田塾大学言語文化研究所特任研究員)

広井 多鶴子(研究所長)

司会：久保 貴子(専任研究員)



## ■ 『下田歌子小伝 下田歌子と実践女子学園の歩み』の刊行

実践女子学園 2022年3月(A5カラー版 39頁、非売品)

『下田歌子小伝』と『オールストーリー下田歌子』がお入り用の方は、研究所にお問い合わせください。

## ■ 『実践女子学園 オールストーリー下田歌子一卒業生の証言』の刊行

下田歌子記念女性総合研究所

2022年3月(B5モノクロ版 66頁、非売品)



<https://www.jissen.ac.jp/shimoda/index.html>

## ■ 「第19回 下田歌子賞」表彰式(協力事業)

2022年1月22日(土)

岐阜県恵那市文化センター 学園資料展示、資料映像の放映

## ■ 「家庭」担当教員向けセミナー④(web開催)

2021年5月 8日(土) 15:20~16:25

7月17日(土) 15:20~16:25

8月 7日(土) 15:20~16:25

講師：高橋 桂子(兼務研究員)

細江 容子(兼務研究員)

大川 知子(兼務研究員)

## ■ 恵那市三学塾の先人学習講座

2022年2月27日(日) 13:30~15:00 恵那市文化センター集会室

講演「下田歌子の家政論と女子教育」

講師：広井 多鶴子

『ニューズレター』 No. 18

発行：2022年2月10日 編集・発行所：実践女子大学 下田歌子記念女性総合研究所

〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1 電話・FAX：042-585-8945 E-mail：shimoda-ins@jissen.ac.jp